

2017 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:15～14:15 60分)

1. 解答用紙には、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入およびマークしてください。解答欄以外への記入およびマークは無効となりますので注意してください。
3. 解答は、**HB**の鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。
4. 解答用紙を折り曲げたり、汚したりしないでください。また、マーク解答用紙を記述解答用紙の下敷きを使用しないでください。
5. 解答用紙には、必ず受験番号と氏名を記入およびマークしてください。
6. マーク解答用紙への受験番号の記入およびマークは、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。
7. 満点が100点となる配点表示になっていますが、国文学専攻（英語外部検定試験利用入試をのぞく）の満点は150点となります。

一 次の文章は、「ベーコン主義」という立場に疑問を呈した後に続くものである。「ベーコン主義」とは、筆者によれば、科学理論が「事実」からの帰納によって得られること、したがって、新しい「事実」が既知の「事実」群に付け加えられることではじめて新しい理論が生まれるとする立場である。これを読んで、後の問に答えなさい。(50点)

コペルニクスは、それまでの地球中心説を逆転させ、太陽を宇宙の中心にすえ、地球の運動を認めたことによって、革命的な業績をあげたと考えられている。そして、コペルニクス革命という言葉は、一八〇度の転換を表現する代名詞の役割をもつに至ってはいるけれども、コペルニクスのこの理論上の転換は、われわれが暗に期待するほど、「近代的」な根拠に基づいて行われたものではないことが指摘されている。コペルニクスが、太陽中心説を採用した理由の一つは、地球中心説を採った場合の諸天体の運動状態の計算が、太陽中心説を採った場合のそれよりもはるかに複雑になる、という点であった。少なくともそれまでのプトレマイオスの地球中心説では、エカントという複雑な数学的なしかけが必要であった。神の理性は、複雑さではなく、単純、簡潔を選んだであろう、とコペルニクスは考えた。そして、科学に、こうした信仰に由来する一種の信念が持ち込まれるのは、「前近代的」である、と現代では見なされる。

なるほどわれわれは、万有引力が「逆2乗」であって、「逆1・98乗」ではない、と考えるに当たっても、べつだん神様を持ち出すことは通常はしない。しかしながら、自然界の構造を定式化するのに、できるだけ簡単な形に仕上げる、もしくは、その定式化は簡単な形になるはずだ、という信念は、われわれにも前提とされており、そうした信念が、経験に基づくものというよりは、経験に先立つものという性格を備えていることは明らかであり、その点では、われわれもコペルニクスと同断である。

(1) それではわれわれも、「前近代的」なのであろうか。

もう一つ興味深い例をあげてみよう。日本に、西欧流の近代科学が育たなかった理由の一つとして、ベーコン主義的な実証精神の欠如が言い立てられることがある。

しかしながら、いささか逆説的ながら、日本が、経験主義的な実証精神を軽んじたことの方が、むしろ歴史的に見れば少ない

のである。日本刀の鋼の組成や反り加減、あるいは血流などはすべて、経験の重積の上に発明されたものであって、⁽²⁾ヤキン理論や、力学や、流体力学などの理論から産み出されたものではない。総じて、「コツ」によるエトクを身上とする日本の科学技術のあり方には、つねに、経験主義的な傾向が色濃く反映されている。

江戸時代、理論的傾向のまさった朱子学が官学としてばっこした時期があったけれども、ただちに古学が興って、「理論偏重」への「反省」を示す。

古学、とりわけ医学におけるそれは、古医方と呼ばれ、いわゆる「親試実験」を旗印に、実証精神を高らかに謳う。⁽³⁾この実証主義は極端なもので、たとえば解剖の意味を認めない。時あたかも蘭医方に刺激された山脇東洋が、日本ではじめての本格的な解剖を行ったころ、古医方の大家吉益東洞は、解剖は「死体」を対象とするが、実際の医家の対象は、決して「死体」ではなく、「生体」にはかならないのであるから、「死体」から得た知識は、「生体」に役立たない、という理由で解剖を斥けてさえているのである。

こうしたいわば側面的な事情から判断できることは、第一に、われわれの科学は、少なくともいくばくか、経験的な「事実」に⁽⁴⁾何ものかによって支えられている、ということであり、第二に、⁽⁵⁾「事実」や「現実」に直接的に密着しようとするところには、科学の体系はない、ということである。そして、この二つのことから、「ベーコン主義」、とりわけて、きびしい推敲や吟味を経ない俗流「ベーコン主義」に対する反論の根拠としては十分であろう。

しかし、このような、科学理論の「超事実性」は何に由来するものであろうか。

「事実」は「事実」であって動かしがたい。科学理論の妥当性は、言うまでもなく「事実」の世界との照合によって一意的に確保される。「事実」が承認する理論は「真」であり、「事実」が否認する理論は「真」ではない。理論体系の真偽は、「事実」が定める。「事実」は、その意味で理論のセイジャを決定するクライテリア⁽⁶⁾（判断基準）である。言い換えれば、「事実」は、理論の外にあって、理論を審判するレフェリーの役割を果たす。

「ベーコン主義」における「事実」と理論との関係を簡単に要約すると、ほぼこのようになるだろう。そして、科学の「即事

実性」は、一面、この立場を基盤に成立していると言つてよい。けれども、はたして、この立場の言うように、「事実」は完全に理論から切斷されており、まったく理論の外にあって、理論とは不関な存在なのであろうか。

もしかして、「事実」は、理論に依存しているのではなからうか。

この文章は、ミスプリントでもなく、私が書き間違つたものでもない。「事実」は、理論に依存しているのではないか、というのが私の立てた問である。

「ベーコン主義者」でなくとも、常識的に言つて、この設問は、ほとんどナンセンスに受け取られるかも知れない。「事実」が理論に依拠している、などというのは、馬の鼻先に馬車をつなぐようなものだ、という印象は、私でもよく判る。けれども、この常識をちよつとの間逆転してみてもどうだろうか、というのが、私の提案である。

「ベーコン主義者」に都合のよい例から出發してみよう。ケプラーの第三法則というのは、惑星の太陽を巡る公転周期の2乗と、惑星と太陽との平均距離の3乗との比が、どの惑星をとつても同一になるものである。理論的に言えば、これは、後に定式化されたニュートンの運動方程式と、万有引力の法則とから、演繹的に証明することができるが、ケプラーがこれを発見したのは、もちろん、演繹によつてではなく、彼が師のティコ・ブラーエから受け継いだ火星に関する詳細なデータをはじめ、数多くの惑星についての数値的なデータから、帰納によつて到達した法則である、と考えられている。

その意味で、ケプラーの第三法則は、通常きわめて「ベーコン主義的」な性格と特徴づけとによつて解釈されているのである。しかし、このケプラーの第三法則でさえ、「事実」(データ)の外からのソクバクがあつてはじめて成立しているのである。ケプラーは、ネオ・プラトニズムの強い影響下に、宇宙を構成する数値的要素の間に、いろいろな種類の「調和」的關係が成り立っている、と確信していた。たとえば彼は、そうした数値的關係を、音組織の構成と結んで、そこから必然的に与えられるメロディを各惑星に当てはめたりもしているのである。

われわれにとつて、エネルギー保存の法則や、ニュートンの運動法則が、自然現象を考察する際の基本的な準拠枠として働いているのと同じように、ケプラーにとつては、そうした自然界の諸数値の間にある種の「調和的關係」が成立している、という

「法則」が、自然現象を考察するための準拠枠として働いていたのである。この準拠枠——私はその言葉の最も広い意味で「理論」と呼びたいが——の働きなくしては、ケプラーは、第三法則を発見することは決してなかったはずである。そして、かりに、ケプラーが、この第三法則を発見することなく、ニュートンやロバート・フックたちが万有引力の法則を発見し、さらに運動方程式や、求心加速度などが定式化されたとしたら、場合によっては、この「惑星の太陽を巡る公転周期の 2 乗と、惑星——太陽間の平均距離の 3 乗との比が、どの惑星でも一定になる」という「事実」は、いまだに発見されていなかったかも知れない。この「事実」はたしかに万有引力の法則とニュートンの運動の第二法則との組み合わせによって演繹することができるが、⁽⁸⁾しかし、ある理論体系から必然的に演繹されることがらが、すべて「知られる」とは限らないからである。ニュートンの運動方程式と万有引力とを組み合わせると演繹されることがらは、ケプラーの第三法則だけではなからうし、それらのすべてを、われわれは知っているとさえ言えないからである。

純粹に帰納的な法則と見なされているこうした法則でさえ、「事実」群があればそこから直接必然的に導かれるものではない。「事実」群外の準拠枠があつてはじめて、「事実」となるのである。「事実」が「事実」であるためには、「事実」たらしめる準拠枠が必要と言えないだろうか。それなくして、「事実」はあり得ないと言えないだろうか。

まして、たとえば「力学」的現象にしても、自然現象のなかに、「質量」とか「加速度」とか「力」などが、そのままビルト・インされているわけではあるまい。むしろ、われわれが、自然現象に対して、「力」「質量」「加速度」という概念枠を通して眺めるからこそ、それらに準拠した「事実」群が、そこから得られる。

科学理論が、「事実」と照合されなければならないことは、改めて認めるまでもない。けれども、もしその「事実」の方が、照合されるべき理論に、少なくとも一部依拠しているのであるとすれば、われわれは、「事実」を科学理論の真偽を定める判断基準として採用することには、ある留保条件を必要とするであろう。さもなければ、自分で自分を評価するという一種のインチキを認めなければならなくなる。

「事実」は、理論とまったく不関に存在しているのではなく、理論体系の枠組みのなかにながしか取り込まれている。とい

うことは、理論が、「事実」から成り立っているわけではなく、「事実」と照合してその真偽が決定されるわけでもないことを示している。

⁽⁹⁾ 理論は、そういう意味で、「即事実性」を備えているのであり、また、あえて言えば、そういう意味で、「超事實的」である。もしその言葉が妥当性を欠くものであるとすれば、「事実先行的」と言い換えてもよい。

とにかく、科学が、「事実」さえ収集すれば、それで発展する、という印象は、単なる迷信に過ぎないことだけは、理解していただけたのではなからうか。理論的發展が見られるのは、決して、新しい「事実」群が急激に入手されたことによるのではなく、旧来の「事実」群を、別の概念枠で再構成することによることが多い、というのも、その点に対する一つの傍証になるであらう。

フランスの、科学的犯罪捜査法を教える学校は、教室に次のスローガンを掲げているという。

「⁽¹⁰⁾眼は、それが探し求めているもの以外は見ることができない。探し求めているものは、もともと心のなかにあったものしかない。」

(村上陽一郎『近代科学を超えて』による)

注 血流し……刀身に掘ってある細い溝(樋)のこと。 親試実験……現在で言う臨床試験。

ネオ・プラトニズム……プラトンの思想を受け継いだ神秘主義的な思想で、ルネサンス期に流行した。

〔問一〕 傍線(2)(3)(6)(7)のカタカナを漢字に改めなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問二〕 傍線(1)「それではわれわれも、「前近代的」なのであるか。」とあるが、ここで筆者が言おうとしているのはどうか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A われわれも日本の伝統的な価値観や自然観にとらわれている点で、前近代的である。
- B われわれも西欧とは異なる何らかの信仰にとらわれている点で、前近代的である。
- C われわれも自分では気づかない何らかの信念を持っている点で、前近代的である。
- D われわれは前近代的ではないが、科学の理論は正しいという信念を持っている。
- E われわれは前近代的ではないが、経験から生まれた何らかの信念にとらわれている。
- F われわれは前近代的ではないが、自然は単純に定式化できるという信念を持っている。

〔問三〕 空欄(4)に入れるのもつとも適当な三字の語を本文中から探し出して答えなさい。(句読点、かっこなどの記述記号も一字と数える)

〔問四〕 傍線(5)「事実」や「現実」に直接的に密着しようとするところには、科学の体系はない」とあるが、筆者は、「事実」や「現実」に直接的に密着しようとする心のあり方を何と呼んでいるか。もつとも適当な語句を本文中から五字以上十字以内で探し出して答えなさい。(句読点、かっこなどの記述記号も一字と数える)

〔問五〕 傍線(8)「ある理論体系から必然的に演繹されることがらが、すべて「知られる」とは限らない」とあるが、そのように

言えるのはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A われわれはある理論体系から導けることがらでも準拠枠の外にあるものには気づかないから。
- B われわれはある理論体系からすべてのことがらを導く能力を持っているとは限らないから。
- C われわれはある理論体系から多くのことがらを導いて体系を完璧にしたいとは考えないから。
- D われわれはある理論体系を作る際に観察したことがら以上に知りたいとは思わないから。
- E われわれはある理論体系をすべてのことがらを説明するために作っているわけではないから。

〔問六〕 傍線(9)「理論は、そういう意味で、「即事実性」を備えているのであり、また、あえて言えば、そういう意味で、「超事実的」である。」とあるが、その説明としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

A 理論が理論の外にある事実と無関係に成り立っていると考えれば、理論は事実から作られているとも言えるし、また、理論は事実を超えて作られているとも言える。

B 理論は理論の外にある事実と合致しなくてもいいと考えれば、理論は事実から作られているとも言えるし、また、理論は事実とは無関係に作られているとも言える。

C 理論になにほどか依拠している事実しかないと考えれば、理論は事実を基に作られているとも言えるし、また、理論は事実にとらわれずに作られているとも言える。

D 理論にまったく依拠しない事実はないと考えれば、理論は事実に妥協して作られているとも言えるし、また、理論はきわめて事実の忠実に作られているとも言える。

E 理論があつて事実というものが成立していると考えれば、理論は事実の忠実に作られているとも言えるし、また、理論は事実そのものを体系化したものとも言える。

〔問七〕 傍線(10)「眼は、それが探し求めているもの以外は見ることができない。探し求めているものは、もともと心のなかにあったものでしかない。」とあるが、科学的な犯罪捜査におけるこのスローガンはどのようなことを言おうとしていると考えられるか。本文の趣旨を踏まえて、もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 自分の直感や経験をもとに調べる範囲をあらかじめ決め、その範囲内で証拠を見つけるようにすべきである。
- B いったん自分の手で多くの証拠を集めた後、それを自分の直感した推論に沿うように取捨選択すべきである。
- C 推論のためにできるだけ多くの証拠を集めるより、今ある証拠を多様な視点をもつてとらえ直すべきである。
- D 客観的な証拠を集めた上で、その中から多くの人の目で見えてどれが有力な証拠となるかを判断すべきである。
- E 自分の目や直感には限界があることを十分自覚し、なるべく思い込みを排して証拠を見つめ直すべきである。

〔問八〕 この文章の特徴の説明としてもつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 西洋と日本から多くの具体例を挙げて丁寧な説明をしつつ、大胆な仮説を提唱し、読者に衝撃を与えようとしている。
- B 科学の理論が生まれる条件を具体例を挙げて考察し、そこから意外な仮説を導き、その妥当性を慎重に検討している。
- C 意表を突く仮説を提示する前に、従来の説でも説明できる具体例を挙げ、さらにそれに反論して説得力を高めている。
- D 具体例を挙げて、それらに共通することを指摘することで、新しい仮説を読者に不自然に思わせないようにしている。
- E 言葉の定義を厳密に示しつつも、具体例に即して言葉を換えながら説明を繰り返し、常識を覆す自説を展開している。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(30点)

甲斐の守義光、左兵衛の尉に侍りし時、このかみ陸奥の守義家朝臣、武衡・家衡等をせめけるを、京に候ひて伝へ聞きけり。御いとまを申して下らんとしけるを、御ゆるしなければ、兵衛の尉を辞し申して、陣に弦袋をかけて馳せ下りける。

近江の国鏡の駅むまやのこなたにて、はなだのひとへ狩衣、青色の袴はかまを着て、引きいれ烏帽子したる男、遅れじと駒にむち打ちて来たるあり。あやしう思ひて見れば、豊原時秋なり。「あれはいかに、なにしに来たりたるぞ」と問ひければ、とかくのことは言はで、「ただ供仕つかうまつるべし」とばかりぞ言ひける。「このたびの下向ものさわがしきこと侍りてなれば、伴ひ給はんこと尤も本意ほんいなれども、やくなし」としきりにとどむるを聞かず、しひてしたひ来(3)にけり。力及ばでもろともに行く行く、相模の国足柄山あしがらに来にけり。ここにて義光馬をひかへてはいはく、「とどめ申せども用み給はで、これまで伴ひ給へること、その志深し。さりながら、この山の関たやすく通すこともあらじ。義光は所職を三拜申して都を出でしより、命をなきものになして罷りまかむかへば、いかなる関にても憚はばるまじ。駆け破りて通るべし。それにはその用なし。これより帰り給へ」と言ふを、時秋(4)なほ受けひかず、また言ふこともなし。

その時義光、時秋が思ふところを汲くんで、道より少し入りて木陰にうちより、柴切り払はせ、馬より下り、盾二枚を敷きて、一枚には我が身座し、一枚には時秋をすまひけり。人を遠くのけて、うつほより文書をとりに出でて、時秋に見せけり。父時元自ら書きたる太食調たいしきてふ入調曲の譜なり。義光は時元が弟子にて管弦の奥義を究めたるものなり。時秋いまだ十歳にもたらぬほどに時元はうせにければ、時秋にはさづけざりけり。「さて、笙しやうはありや」と問ひければ、「候ふ」とて、懐よりとり出だしたりける、用意のほどまづいみじうぞ侍りける。「かくしたひ来給ふはさだめてこの料れうにてもや侍らん」とて、入調曲をさづく。

「義光はかかる大事によりて罷れば、身の安否あんが知りがたし。ももにひとつも安穩ならば、都の見参を期すべし。そこには豊原数代の楽工、朝家要須の仁也。我に志をおぼさば、すみやかに帰洛きらくして、道を全まうせらるべし」と言ひければ、理(8)に負けて上りにけり。

〔時秋物語〕による

注 義光……源義光。 義家……源義家。 武衛……清原武衛。 家衡……清原家衡。 陣……武士の詰所。

弦袋……弓弦を入れる袋。 はなだ……薄い藍色。 引きいれ烏帽子……烏帽子を目深にかぶること。

うつぼ……矢を入れて背負う武具。 太食調入調曲……笙の秘曲。 譜……楽譜。 笙……笙の笛。

〔問一〕 傍線(1)(2)(6)の語句の意味としてもっとも適当なものを左の各群の中から選び、符号で答えなさい。

(1) 「いとまを申して」

- A 職を放棄して
- B 休職を願い出て
- C 主従の縁を断つて
- D 離別の挨拶あいさつを交わして

(2) 「本意」

- A 本来の目的
- B 変わらぬ意志
- C 願わしいこと
- D 将来に望むこと

(6) 「いみじうぞ侍りける」

- A うれしくなる程でありました
- B 抜かりないのでありました
- C 忌まわしいのでありました
- D 恐ろしい程でありました

〔問二〕 左のA～Dの和歌のうち、傍線部が傍線(3)「に」と同じ品詞・意味のものはどれか。正しいものを一つ選び、符号で答えなさい。

- A いざ子ども早く大和へ大伴の御津の浜松待ち恋ひぬらむ (万葉集)
- B 思ひつつぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを (古今集)
- C 契りおきさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり (千載集)
- D 春の色のいたりいたらぬ里はあらし咲ける咲かざる花の見ゆらむ (古今集)

〔問三〕 傍線(4)「なほ受けひかず」とあるが、そのような行動をとらせる根本的な原因が記されている一文を本文中から探し、その初めと終わりの五文字を書き出ささい。(句読点、かつこなどの記述記号も一字と数える)

〔問四〕 傍線(5)「思ふところ」とはいかなる思いか。もつとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 並び称される同じ笙の名人として、どうしてもしても義光を死なせたくない、という思い。
- B 義光に笙の太食調入調曲の伝授を受けるまでは、死ぬ覚悟でついで行く、という思い。
- C 自分の父に笙の奥義を教えた義光の恩に、父亡き今、自分がどうしても報いたい、という思い。
- D 義光から太食調入調曲の伝授を受けた恩義に報いるため、どこまでもついで行く、という思い。
- E 滅亡した管弦の家、豊原家を再興するため、義光の援助の確約を得るまでは、どこまでもついで行く、という思い。

〔問五〕 傍線(7)「かかる大事」の内容が具体的に記されている二十五字以内の部分本文の中から探し、その初めと終わりの四文字を書き出ささい。(句読点、かつこなどの記述記号も一字と数える)

〔問六〕 傍線(8)「理」の内容として、もっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 義光の代わりに朝廷に仁の道を伝えるため、時秋はすぐに都に戻るべきだ、ということ。
- B 時秋は譜が読めないので、その道を全うするため、すぐに都に戻るべきだ、ということ。
- C 滅亡した管弦の家の末裔として豊原家を再興するため、時秋はすぐに都に戻るべきだ、ということ。
- D 互いに生き延びて、都で再会し秘曲の伝授を続けるため、まず時秋が都に戻るべきだ、ということ。
- E 管弦を代々伝える樂家の跡継ぎとしてかけがえのない存在であるため、時秋はすぐに都に戻るべきだ、ということ。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある)(20点)

袁随園宰^{つかさどル}江寧^ワ。城中^ノ韓姓^ノ女^{むすめ}為^れ風^ニ吹^カ至^ル銅井村^ニ。離^ル城^ヲ九十里。村氓^{ぼう}次日^ニ送^リ女^ヲ還^カ家^ニ。女^ニ已^ニ嫁^ト東城^ノ李秀才^ノ子^ニ。李疑^フ風^ハ無^ク吹^ク人^ヲ九十里之理^一、必^ズ有^リ姦約^一。控^ツ官退婚^ヲ。袁曉^レ⁽¹⁾之^ヲ曰^ク、「古^ニ有^リ風吹^キ女子^ヲ至^ル六千里^ニ者^ト。汝知^ル之^乎」。李不信^ゼ。取^リ元郝文忠公^ノ『陵川集^ヲ』、示^シ之^ニ曰^ク、「郝公^ハ一代忠臣^{ナリ}』⁽²⁾。豈肯^{アヘテ}作^ナ誑語^ナ者^モ。第^ニ当年風吹^キ吳門^ノ女^ヲ、竟^ニ嫁^グ宰相^ニ、恐^レ汝子無^ク福耳^一。李讀^ミ詩^ヲ大喜^ブ。兩家婚配^ス如^ク初^ニ。是^レ知^ル聽^ク訴^フ者^モ当^ニ博古^{ナリ}也^一。

(陸以活『冷廬雜識』による)

注 袁随園……清の袁枚。 江寧……地名。 里……約五七六メートル。 村氓……村民。 嫁……縁組をするこ

と。 控官……役場に訴えを起すこと。 退婚……縁組を取り消すこと。 郝文忠……人名。 誑語……でた

らめな話。 吳門……蘇州のこと。 聽訴……訴えを裁くこと。 博古……昔のことに詳しいこと。

〔問一〕 傍線(1)「之」が指す人物としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A 韓姓女 B 村氓 C 李秀才 D 李秀才子 E 官

〔問二〕 傍線(2)「豈」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で書きなさい。(平仮名以外に何も書かないこと)

〔問三〕 傍線(3)「恐汝子無福耳」は「なんぢがこふくなきをおそるのみと」と読む。これに従って、解答欄の原文に返り点を

付けなさい。(返り点以外に何も書かないこと)

〔問四〕 傍線(4)「如_レ初。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選び、符号で答えなさい。

- A もとのままになった。
B なかったことにした。
C 最初からやり直した。
D 昔の例と同様だった。
E 詩とそっくりだった。

〔問五〕

本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選び、符号で答えなさい。

- A 袁枚は、人が風で飛ばされる距離として、六千里より九十里の方が現実的だと考えていた。
- B 訴えを起こした人物は、袁枚の該博な知識に基づく説得の結果、自分の非を悟るに至った。
- C 袁枚は、博識によって、訴えを起こした人物を納得させるだけの判断を下すことができた。
- D 韓氏の娘は、李秀才の息子と夫婦になれば、自分が夫の将来の出世に役立つと信じていた。
- E 袁枚は、銅井村の村民と韓氏の娘の不適切な関係を隠すために、過去の伝説を持ち出した。

